
3 番隊のリリー

とまと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

3 番隊のリリー

【Nコード】

N 4 7 4 6 Z

【作者名】

とまと

【あらすじ】

ストレンジャー

地球外生命体が地球に降り立ってから数年。ストレンジャーから地球を守るため特殊防衛部隊、通称SFDが発足された。ある時、資産家のターラント家がストレンジャーの襲撃を受ける。リリーは逃げる途中で母親を殺された。そして自身も殺されるというところでSFDの隊員に助けられる。それから10年の歳月が流れ、リリーは命の恩人である隊員に会うためSFDに入隊した。運よく配属された先は、リリーが追いかけてきた恩人アラン・マクレナンが率いる戦闘部3番隊。リリーはアランにアプローチを試みるが、アラ

ンは仕事に真面目な堅物で……国民的ヒーローのアランと平隊員リリーの恋の行方は？

惨劇の夜（前書き）

某ヒーローアニメに影響を受けてヒーローっぽいものにしてみました。

初めての連載形式での投稿です。（今まではまとめて投稿してたので）

最後までお付き合いいただけると幸いです。

惨劇の夜

突然の襲撃だった。

静かに眠るリリーの耳に恐ろしい叫び声が聞こえた。それに続いて慌ただしく乱暴に走り回る足音。リリーは恐る恐る起き上がった。

——… パパ？

震える体を抱きしめながらリリーはそつと外の様子を窺った。今度は鮮明に音が聞こえる。騒ぎは突き当たりにある父親の部屋で起きているようだった。

「家族には危害を加えないでくれ！」

父親が必死に誰かと交渉している。相手の声はよく聞き取れない。だが父親が危険な状況であることだけは理解できた。

——ウィルを呼ばなきゃ……！

ボディーガードに助けを求めようとするも恐怖で体が動かない。

自分の部屋から半分だけ顔を出したまま固まっていると安心する声に名を呼ばれた。

「リリー」

「ママ………！」

金縛りが溶けたように母親のもとへ駆け寄る。いつもの温もりに触れてようやくリリーは落ち着きを取り戻した。

「ねえ何が起きたの？ パパは誰と話してるの？」

「後で話すわ。とにかく今は急いで逃げるのよ」

「パパとお兄様は？」

「お兄ちゃんは今先に行ってるわ。さ、早く」

リリーは母親に手を引かれ階下へ向かった。

「何これ……」

廊下に出ると辺りは火に囲まれていた。一瞬足を踏み出すのを躊躇う。しかし母親は容赦なくリリーの手を引いて火の道を走り抜けた。

階下に着く頃には火傷だらけで泣きたいほど痛かった。ネグリジエの袖で口を押さえてはいたが煙も吸ってしまったようで息も苦しい。

——早く外に……！

広いエントランスにたどり着くと必死に扉に向かって走った。母親が扉に手をかけようとしたその時——突然目の前から姿を消した。

「え……？」

事態が飲み込めずに思わずこぼれた声。そして次の瞬間、リリーは何かにつまずいて倒れた。急いで起き上がりつまずいたものを確認する。

「……ママ……？」

リリーの目の前には先ほどまで手を引いてくれていた母親が横た

わっていた。

「ママ……ママ、ママ！」

呼び掛けても揺さぶってみても反応はない。得たいの知れない不安と恐怖がリリーを包み込んだ。

「お前はアイザック・ターラントの娘だな」

聞いたことのない声が後ろで父親の名を口にした。リリーはゆっくりと振り向いた。そこには人の形をした白い光の塊が立っていた。異常な光景に悲鳴も出てこない。リリーはさすがのように母親にしがみついた。

「すぐに母親と同じところへ連れて行ってやる」

光に包まれた指がリリーに突きつけられる。何が起きるのかわからないが自分が死ぬのだということはわかった。

「ママ……」

もう動かない母親の胸に顔をうずめる。死を覚悟したその時どこからともなく声が聞こえてきた。

「そこまでだ！」

「え……？」

リリーが振り返ると同時に白い服を着た人らしきものが飛んできて立っていた白い光を吹っ飛ばした。

「大丈夫か？」

そう言ってリリーをかばうスーツには見覚えがある。地球外生物と戦うために設立された特殊防衛部隊、通称SFD。隊員はリリーが動けることを確認するとリリーの頭に手をのせた。

「少し目をつぶっている」

それだけ言っつと隊員はすでに起き上がっていた白い光と向かい合う。これから起こることを予想してリリーは再び母親の体に顔をうずめた。背後からは殴る音や何かが焼ける音、どちらのともつかないダメージを受けた声が聞こえる。

何時間にも思える時間が流れた。戦う音が止んだ。

「外に出るぞ」

隊員はリリーを軽々と横抱きにした。そしてそのまま扉を蹴破り外に出ようとする。

「待って！ママがいるわ！」

「ママ？」

そう言っつてから隊員は足元に倒れている女を見てリリーのいわんとするところを察した。

「ママは……もうダメだ」

「なんで！嫌っ！ママ！ママ！」

暴れるリリーを隊員は肩に担ぎ直す。

「ママああああ！」

燃え盛る炎の中に横たわる母親にリリーは届くはずのない手を伸ばし続けた。隊員は悲痛な叫びに顔をしかめながら屋敷を後にした。一夜にしてターラント家の屋敷は姿を変えた。丘の上に建つ小さな城と呼ばれた建物はほぼ全壊。犠牲者が一人ですんだのが不思議なくらい無惨な姿になっていた。

「ママあ……」

隊員にしがみついたまま黒い闇と同化してしまった我が家に向かって呼び掛ける。しかし二度と返事を聞けることはない。急すぎる喪失にリリーの思考は凍りついていた。感情も涙も体も……――

「風邪を引く」

隊員はリリーの冷えきった体に自分の上着をかけた。防護服を兼ねたそれは重いが暖かい。しかしリリーはそれを拒んだ。

「けっこうです」

「この寒空にそんな格好じゃ風邪を引く」

「いいんです。もう生きていたくない。ママのところにいきたい……」

「君のママはそんなことは望んでいない」

「わかったような口をきかないでよ！」

睨んだ先の表情は読み取れない。それがいつそうリリーを苛立たせた。母親が望むことぐらいわかっている。わかっているも今は生きたいと思えないのだ。母親のいない世界など生きている意味がない。

「そうでなければ君を炎の中から連れ出そうとしたり我々を呼んだりしない」

「……」

「お母さんが助けてくれた命を大切にするんだ」

——ママが助けてくれた命……

溢れくる涙が止まらなかった。渡された上着に顔を押し付け、声をあげて泣いた。隊員はリリーが落ち着くまでその背中を優しくなでていた。

「悲しければ強くなれ。今度は君が家族を守るんだ」

最後にささやかれた言葉はリリーの頭にいつまでも残っていた。

10年越しの再会

ターラント家の惨劇は国中を震撼させた。地球外生命体が突如として地球に降り立ち、破壊行為を始めたのが5年前。しかし、今回のように特定の人物を徹底的に狙った襲撃を行ったことはなかった。郊外に住む資産家ターラント家に起きた突然の悲劇。当主であるアイザックは妻を失ったショックから従業員全員に暇を出し屋敷に閉じこもってしまった。娘も息子も学校では腫れ物を触るかのような扱いを受け、次第に姿を消した。

なぜターラント家は狙われたのか——SFDによる調査は遅々として進まず、時間だけが流れていった。

そして10年後の春。今年もSFDに新入隊員が配属される季節がやってきた。

SFD施設内にある訓練場のただっ広いエントランスは新入隊員で溢れかえっていた。壁にはそれぞれの配属先が書かれた紙が大きく貼り出されている。紙にはエリート集団と言われる戦闘部隊から順に名前が書かれているため、誰もが自分の名前の他に戦闘部隊に所属する者の名前には目を通す。その中で一際目を引く名前があった。

リリー＝ターラント／戦闘部3番隊

新入隊員たちが様々な憶測を飛ばす中、リリーは自分の名前を確認すると小さく微笑んだ。

「おめでとう。3番隊配属だつてね」

その夜、リリーは最上階の高級レストランで彼氏のハーマン・アンソニーとディナーをしていた。顔を横に向ければ首都の夜景が一望できる。

「第一志望だつて言つてたもんな」

「ありがとう」

同期の中で一番人気があるハーマンの祝いの言葉にも、リリーはディナーを食べる手を止めることなくそっけなく応える。そして興味もなさそうに「ハーマンはどこに決まったの？」と尋ねた。

「俺は情報部。戦闘部隊も懂れるけど、やっぱり俺はこっち使う方が向いてるからさ」

そう言つてハーマンは自分の頭を指差した。リリーは「そう」ただけ言つて食後の紅茶に口をつける。

「そうだ、これ俺からのプレゼント。配属祝い」

ハーマンはジャケットの内ポケットから小さな箱を取り出した。それをテーブルの上に置くと、そつとリリーの方へ差し出す。リリーはそれを見るなり、丁寧に差し出された箱を押し戻した。

「いらないわ」

「え？」

リリーは静かにナプキンで口を拭くと、予想外の反応を受けて間抜けな顔をしているハーマンにはつきりと告げた。

「私たち今日で終わりにしましょう」

「なっ！どういうことだよ！？」

思わずハーマンはテーブルに手を着いて腰を浮かした。店にそぐわない雰囲気周りの客や店員からの視線が集まる。視線に気づいてハーマンはすぐに腰を下ろした。そして、説明を求めるようリリーの表情をうかがう。しかし、リリーの表情からは何も読み取れない。

「SFDの3番隊に配属されたんだもの。これからは忙しくて会えなくなるわ」

「そんなの働いてみなきゃ分からないだろ？さすがに休みだってあるだろうし……」

「働き始めは仕事に専念したいの。先輩たちに迷惑をかけたくないし。そういうわけだから……」

そう言つとリリーは鞆を持って立ち上がった。

「さようなら」

突然のことにハーマンは呆然としたまま追いかけることができなかった。

「お前、ハーマンと別れたんだって？」

初出勤の日、任命式を終えた新入隊員たちは2列になってそれぞれ隊室へ向かっていた。まだ学生気分の抜けない隊員たちの間か

らは小さな話し声が聞こえる。背筋を伸ばして歩いていたリリーにも隣を歩く同期が話しかけてきた。パーシー「オスメント——同じ3番隊配属の新人だ。」

「そうよ。それが何か？」

「いやいや。またか、と思つてさ」

パーシーとはSFD養成学校に入学した頃からの付き合いで、リリーの恋愛遍歴もよく知られている。またか、と言われるのももう慣れていた。詮索されるのも面倒くさいので前を歩く隊員の背中に視線を移す。

「学生の中から学年が変わる度に男も変えてたよな」

しつこく食いついてくるパーシーにうんざりしてリリーは無視を決め込んだ。パーシーは一人で勝手に喋っている。他の隊員も近くの人と話しているからパーシーの語るリリーの恋愛遍歴を聞いたりはしていないだろう。

パーシーはいい友人なのだが、人の恋愛ごとになると女以上に食いつくのが欠点だ。誰と誰が付き合っていて、誰と誰が別れて、誰が誰のことが好きなのかという情報はほぼ掴んでいる。ただし、それを軽々しく他言しないという点で信頼が保たれていた。

「ところでさ、リリー。ハーマンは何でダメだったんだ？」

「え？」

自分の名前に思わず反応してから後悔した。パーシーが興味津々といった目で見つめている。どう説明しようかと考えていると「夜の方が下手だったとか？」と下品なことを囁いてくるので持っているクリップボードで思い切り頭を叩いてやった。気持ちのいい音が

響き近くの隊員の視線が集まる。

「痛ってえなあ!」

「あんたが下品なことを言うからでしょ!」

パーシーは愛想笑いで周りの注目をかわすとリリーの耳元に顔を近づけて同じ質問を繰り返した。

「んで? ハーマンは何がダメだったんだ?」

全く懲りないパーシーの顎を指で持ち上げるとリリーは悪戯っぽく微笑んで言った。

「他に好きな人ができたの」

「へ……?」

足を止めたパーシーを置いてリリーは歩を進めた。いつの間にか隊員数は減り、目の前のドアには「戦闘部3番隊隊室」と書かれている。リリーも小走りで追いかけてきたパーシーもドアの前で姿勢を正した。

「いくわよ」

リリーの掛け声にパーシーはしっかりと頷いた。リリーがドアをノックする。

「失礼します!」

気合を入れた声と共に部屋の中へ足を踏み入れた。目に付いたのは長方形に並べられた事務机とその上に置かれているパソコンに向

かっている先輩たちの姿。リリーたちの声に反応して一斉に顔がこちらを向いた。その中でもリリーの視線はある人物で留まる。

——やっと辿りついた……

「ようこそ、我が3番隊へ。私が隊長のアラン・マクレナンだ」

忘れもしないその顔、その声。10年前よりも大人の男らしさが増しているが、見間違えはしない。ようやく会えた命の恩人。そして……

——私の運命の人……

アランⅡマクレナン

『アランⅡマクレナン、34歳。』

卓越した戦闘能力と分析力を持ち、入隊3年目にして異例の副隊長に昇格。その二年後には隊長に昇格し現在に至る。国民からヒーローとして尊敬を集めるBIG7の一人でもある。

強靱な脚力の持ち主で、ストレンジャーに対しては必ず先制攻撃を仕掛けて確保する。その姿がスーツの色もあいまって白い鳥が獲物に飛び掛るように見えることから”白き鷺”ホワイットホークスの異名を持つ。』

「なんだ、この完璧すぎるプロフィールは！」

ランチの片手間に戦闘部の入隊案内パンフレットを読んでいたパーシーはそれを机に投げ出した。社員食堂は混み合っていて騒がしく、パーシーのそんな言動を気にする人はいない。投げ出したパンフレットはそのままに、パーシーは不機嫌そうな顔で残りのカレーを食べ始めた。

パーシーの正面で一連の動きを見ながら食事をしていたリリーは、パーシーが投げ出したパンフレットを拾ってページをめくった。

「これ、養成学校のとくに進路指導で配られたやつよね？まだ持ってたの？」

「第一志望だったから捨てにくくてさあ」

「……へたれ」

自分の発言でむせるパーシーを無視して、リリーはアランのページを見つめる。広報を兼任しているBIG7なのに、写真慣れしていないのか無表情で写っているところがアランらしい。配属されて3日しか経っていないが、隊員の噂や日頃のアランの様子から愛想

をふりまけるタイプでないことは把握していた。そんなところがまた女性の人気を上げている要因の1つとなっている。

「それに比べてアラン隊長は男前だし仕事はできるし素敵よねえ」

うつとりパンフレットを見つめるリリーをパーシーはむっとした表情で見つめる。そして意地の悪い笑みを浮かべた。

「何？お前の好きな奴ってまさか隊長とか言わねえよな」

リリーはパンフレットから視線を外してパーシーを見た。リリーがこちらを向いたことに満足感を覚えるパーシー。しかし、それも束の間のことだった。

「そうよ。それが何か？」

「……え！？ちよっ、お前、マジかよ？」

「本当よ。絶対に落として見せるわ」

自信満々に意気込むリリーとは対照的に、パーシーは放心状態でリリーを見つめていた。

リリーの恋愛には周期がある。毎年、進級などで環境が変わると彼氏が変わるのだ。ハーマンと別れたと聞いたとき、パーシーはチャンスだと思った。同期で同じ隊に配属となれば一番過ごす時間が長いのは自分だ。リリーと付き合うなら今しかない。だが、リリーの理想はもっと高かった。アランは国民からも部下からもヒーローとして慕われている。勝てるはずがない。

「あら、もうこんな時間。訓練が始まっちゃうわ。行きましょう」

がつくりと肩を落としたパーシーには気づかずに、リリーはトレ

イを持って席を立った。アランは遠ざかっていく同期の背中を複雑な気持ちで見つめていた。

アランは10年前と変わらず、部下の目線から見てもかつこいい上司だった。任務における指示は的確で戦闘もずば抜けて強い。時には部下に厳しい言葉を向けたり、難しい任務を与えたりもするが、そのフォローはそつがなかった。

戦闘部隊の隊長は知能や戦闘の能力の他に、人の上に立つに相応しい人物かどうかも問われる。それだけではない。彼らは隊長であると同時に国民の希望となるための広告塔——BIG7という仕事も行う。正体不明の生物、ストレンジャーの侵略で不安になっている人々を安心させるために作られた役割だ。人々は彼らを”ヒーロー”として尊敬し、信頼している。それゆえ、彼らは人格者でなくてはならない。

アランはそのBIG7の中でも三本の指に入るほどの人気だった。それは対世間だけのことでなく、隊内の人間からも慕われている。入隊して2週間が経ったころ。リリーは自分の目に狂いはなかったと確信した。

「私、隊長に告白するわ」

「ぶほっ！」

突然の宣言にパーシーは飲んでいたコーヒーを吹きだした。リリーにかけなかったところは見事だが、周りからは冷たい視線を向けられ、被害のなかったリリーも「ちよっと！汚いわね！」とすつかり怒っている。

リリーと周りの人々に謝りながらパーシーは机に備え付けてあった紙ナプキンで周囲を拭いた。

「そりゃ、リリーが突然驚くようなことを言うからだろ？」

「突然かもしれないけど、別に驚くようなことじゃないでしょう？ 私が隊長を好きなのはパーシーだって知ってるじゃない」

「それは、そうだけど……」

それにしたって、あのアラン隊長だろ！？と思うのはパーシーだけじゃないはずだ。BIG7はたえて言うなら超人気アイドルのような存在。いくら同じ部隊に属しているとは言え、恐ろしくて配属2週間で告白しようなどとは間違っても思わない。

それだけリリーは自分に自信があるのだ。自分の魅力を知っていて、それをどう見せればいいかというところまで分かっている。そこがリリーのすごいところだ。そして、その魅力が計算されたものだと分かっている者は、彼女の賢さに惹かれていく。パーシーはその一人だ。

「……やめとけよ」

「は？何でよ？」

「だってあの人、上司としてはすげー尊敬できるけど、女性関係はひどいみたいじゃん」

パーシーの言葉にリリーは一瞬言葉を詰まらせた。

国民的ヒーローであり身内からも慕われる優秀な隊長は当然ながら女性にもモテた。普段から歩いているだけで女性の注目を集め、バレンタインや誕生日などのイベントには女性からのプレゼントが山積みになる。

騒がれるだけでなく、実際に付き合った例もある。いずれも隊内でもいい女と評判の高い美人ばかりだ。しかし、付き合ってからアランが仕事優先で恋人らしいことをろくにしないので別れる、というのがいつものパターンだった。

「大丈夫よ。今までの女性はみんな隊長の仕事に理解がなかったからダメだったのよ。私は一番近くで見ているんだから、隊長の仕事に対する姿勢だって受け入れられるもの」

「でも、そんなんじや後回しにされて恋人らしいことなんてしてもらえないかもしれないぞ？」

「そこは私の腕が試されるところね」

リリーは悪戯っぽく笑って自分の腕を叩いて見せた。パーシーは「あつそ」とだけ言って残りのコーヒーを半ばやけくそで飲み干した。少しぬるくなったコーヒーはいつもより苦く感じた。

アラン＝マクレナン（後書き）

読んで下さりありがとうございました。

次回更新はしばらくお待ち下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4746z/>

3 番隊のリリー

2011年12月28日01時47分発行